

妹

むつ市立田名部中学校3年 山本 陽香

「誕生日までにまたおいで、タダだからね。」笑顔の歯科衛生士さんが、妹に言った。そのまま支払いをせずに戻ってきた母を見て、不安になった。「お母さん、お金ないのかな。後で家に取り立てに来たらどうしよう。」幼い私の疑問に、母は笑いながら「この町ではね、小学校に入るまでは、歯医者さんも病院もお金を払わなくていいのよ。」と答えた。「じゃあ、お医者さんが損するの」と聞くと、「難しい話だけど、小児医療費助成制度っていうのがあって、子供の病院代は、税金っていうお金で、大人たちみんなが払っているの」と教えてくれた。私は、なんとなく分かったふりをしていた。

数年が経ち、色々なことが分かるようになった私に、母はこんなことを教えてくれた。私や姉、兄は健康に育ったので、ほとんど病院に行くことがなく、医療補助制度のありがたさが分からないどころか、納税による損すら感じていたらしい。しかし、障害をもって生まれてきた妹は、入退院を繰り返したり、救急車やドクターヘリのお世話になったりしてきた。小学校に入る前に、二度の手術も経験している。それらの医療費を合計すると、ざっと数百万円はかかっている。特別にお金持ちではない一般家庭が、四人の子供を育てながらそのお金を支払うのが難しいことくらい、私でも分かる。母は、「小児医療費助成制度のおかげで、お金の心配だけはせず、あなたたちを育てることに心を向けることができた。」と言っていた。私の妹は、みんなが納めてくれた税金のお陰で、今では体も丈夫になり、毎日うるさいくらい元気に走り回っている。

私達は、日々の生活の中で常に税を意識して生活しているわけではない。しかし、自分や家族の努力だけではどうにもならない時、税のありがたさを強く感じることもあるのだ。

税の集め方や使い方は、各自治体によって様々であり、また、それぞれの状況においては、税の恩恵をあまり感じられずに過ごしている人もいるだろう。しかし、危機がいつ自分を襲うかは、誰にも予想できない。例えば、現在猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症や、大雨による水害などの対応は、個人の努力だけでは限界がある。いざ当事者になった時、日頃から納めている税が、社会全体の力となって自分を助けてくれることがあると思う。

私はまだ、消費税くらいしか払う機会がないが、大人になった時は、妹を助けてもらった感謝の気持ちをもって、しっかりと納税したいと思う。そして、その税がまたどこかで誰かを助けることになれば、とても嬉しいと思う。私達は、税によって誰かに助けられ、税によって誰かを助けることができるのだ。